

11-1資本は資本主義的生産関係の中でのみ資本として働く

「しかし、利子生み資本では資本呪物の観念が完成されている。この観念によれば、積み重なった、しかもそのうえに貨幣として固定された労働生産物には、生まれつきの秘密な性質によって、純粹な自動機関として、幾何級数的に剰余価値を生み出す力がそなわっているのであり、したがってこの積み重なった労働生産物は、『エコノミスト』誌が言っているように、あらゆる時代の世界のいっさいの富を正当に自分に帰属するものとしてすでに久しい以前から割引してきたのだというのである。過去の労働の生産物、過去の労働そのものが、ここではそれ自体として現在または未来の生きている剰余労働の一片をはらんでいるのである。ところが、だれでも知っているように、じつは過去の労働の生産物の価値の維持は、そしてそのかぎりではまたこの価値の再生産も、ただ、それらの生産物と生きている労働との接触の結果でしかないのであり、また第二に、過去の労働の生産物が生きている剰余労働に命令するということが続くのは、まさにただ、資本関係、すなわち、過去の労働が生きている労働にたいして独立に優勢に相対しているという一定の社会的関係が存続するあいだだけのことなのである。」（大月版『資本論』④ P501F2-B1）